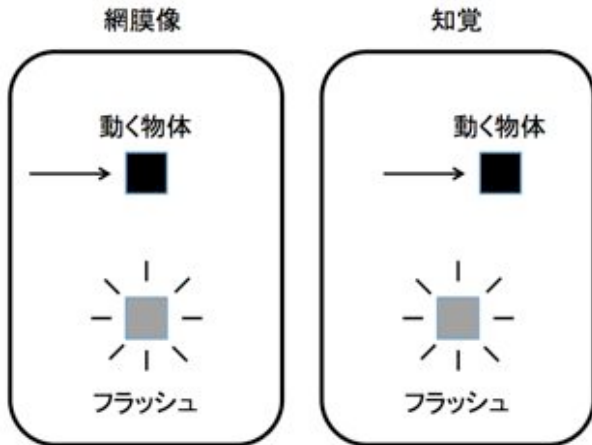




フォワードは損？オフサイドの誤審を引きおこす視覚の錯覚

柴田 和久 (心理学)



小学校の頃からサッカーが好きで、いまもプレーしています。ポジションはフォワードで、スピードを活かして相手ディフェンスラインの裏に抜ける動きが得意です。

僕のようなタイプのフォワードにとって、オフサイドというのは厄介なルールです。オフサイドとは、ひとこと言うと待ち伏せを禁止するためのルールです。具体的には、僕が相手ディフェンスの最終ラインよりも相手ゴール側にいる状態で味方から僕にパスが出ると、待ち伏せとみなされ、相手ボールになってしまいます。

オフサイドの判定は、線審とよばれる審判によって行われます。線審は常にディフェンスの最終ラインをモニタし、ひとつひとつのパスがオフサイドか否か見極めます。この判定はとても重要です。オフサイドの誤審は、得点に直結するからです。

しかし、線審が判定する限り、オフサイドの誤審がなくなることはなさそうです。それは、フラッシュラグ効果という現象に起因します。画面に動く物体が提示され、ある瞬間にフラッシュが起こるとします。このとき、物体の位置は実際よりも進行方向より進んで知覚されます。網膜に映る像(図左)に比べて、知覚(図右)のうへでは、物体がより進んで見えてしまうのです。動く物体をフォワード、フラッシュをパスが出た瞬間と置き換えると、線審にとってフォワードはいつもちょっと進んで見える、つまり実際に比べてよりオフサイドっぽく見えてしまうということになります。

フォワードは損だなあとと思いつつ、ヒトが判定するからこそこんなことも起こるのだと、面白くも感じています。この特性を逆に利用して、オフサイドにひっかけりにくい動き方をあみだすことができたりすればいいのですが。

学生たちの研究生活—File30

考古学にはロマンがいっぱい

研究室名：考古学研究室

こんにちは！考古学研究室です。突然ですが、皆さんは「考古学」と聞くとどんなことを思い浮かべますか？「地面に穴をたくさん掘ってお宝を発掘」「ピラミッドとか前方後円墳」「歴史に詳しく」「縄文土器」等々、様々なイメージがあるのではないのでしょうか。今回は、考古学研究室のロマン溢れる研究内容について紹介したいと思います。

私たちは、「遺跡から出土した資料を用いて人間の歴史を復原する」ことを目的として研究を行っています。

遺跡から出土するものには、土器や石器、装飾品、金属器、瓦などのほかにも、土の中に残った動物の骨や、目に見えないくらい小さな植物の花粉や種子までもが含まれています。お宝的なもの



(名古屋大学構内での遺跡調査風景)

は全くと言っていいほど出土しません。一見するだけではその価値がわからないようなものがほとんどです。しかし、この価値がないように見えるものを詳細に分析・検討し、そこから歴史を導き出すことに我々考古学を学ぶ者は喜びを感じるのです。

例えば、遺跡から出土する植物の種子や花粉。土を何度も洗い、洗った土を何度もフルイにかけ、顕微鏡で観察してやっと見つかるような小さなものから、当時の環境や生活の様子、その遺跡に暮らした人々がどのような植物をどのように利用していたのかを明らかにすることができます。

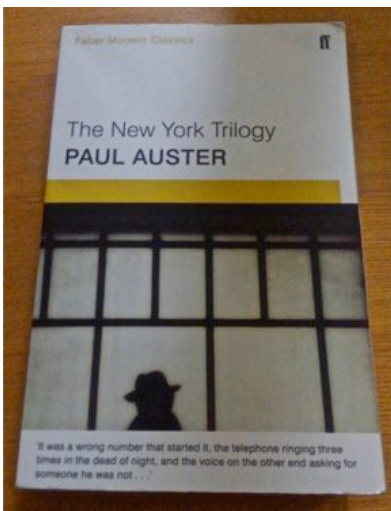
今自分が立っている場所には、かつてどんな環境が広がっていたのか。そこに住んでいた人たちは何を食べてどんな暮らしをしていたのか。扱うものや対象とする地域や時代はそれぞれ異なりますが、考古学研究室では先生方、学生がみんな切磋琢磨しながら、でもとても賑やかに毎日楽しく研究に励んでいます。みなさんも考古学の扉を開けてみませんか？ [内藤 千温（博士前期課程2年）]

学生たちの研究生活—File31

英米文学の研究とその魅力

研究室名：英米文学研究室

皆さんは英米文学に興味がありますか？ 正直あまりないなと思った人が少なからずいらっしゃると思います。かくいう私も、今でこそ英米文学に親しむようになりましたが、所属以前は数作品程度しか海外文学を読んだことがありませんでした。そんな私でも今研究を続けていられているのは、偏に英米文学の魅力に触れられたからです。そしてそのきっかけをくれたのは研究室の授業でした。それでは



この場をお借りして、皆さんが英米文学に少しでも興味を抱いてもらえるよう、英米文学研究室で行われている授業の紹介とその面白さをお伝えしたいと思います。

今回紹介するのは、大学特有のディスカッション形式で行われる演習についてです。基本的に演習は、英語で作品を読むという予習を前提にしてスタートする授業です。実際の授業では、言葉や表現された内容について自分が気づいた点や作品自体のまとめなどを担当の学生が発表し、先生や他の学生がそれに対してコメントをしたり、意見を付け加えたりします。考察の対象範囲は単語単位の場合もあれば作品全体のテーマやモチーフに及ぶ場合もあります。前者の例でいうと、今期(平成27年度後期)の演習で扱っている、アメリカの作家 Paul Auster の *City of Glass* という作品では、タイトルの Glass という単語が「ガラス」と「鏡」のどちらがふさわしい意味なのかという議論が繰り広げられました。

英語で作品を読むことも発表の内容を練ることも、決して容易なことではありません。しかしながら、自分自身で作品を紐解き深く探っていく作業は、考える力の尊さを私たちに教え、英米文学の深みを探索したいという欲求を刺激します。英米文学研究の魅力はそこに収斂されているのではないかと私は思います。 [小柳津 美美（学部4年）]

最近の文学部

前期の授業もあと一息

新入生にとっては慣れないことだらけの3ヶ月が怒濤のごとく過ぎ、早くも7月。楽しい夏休みの前には学期末試験とレポートの嵐が待ち受けています。特に初めての大学でのレポートについては不安も多いようです。8月10日のオープンキャンパスでは、少しほっとした名大文学部生の生態も観察できるかもしれません。(YK記)

*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は... 名大文学部のWEBサイト <http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/> まで(『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります)